

教えの庭から

お釈迦様は、29歳で出家し、35歳で悟り、45年間教化活動を行って、80歳で入滅されました。私は、今月の19日にその釈尊入滅の80歳になります。振り返ってみますと、寺に生まれ、仏教に出会う縁に恵まれたことを本当にありがたく思います。ここに至るまでには、数々の挫折を味わいましたが、それを乗り越えることができたことを感謝しています。

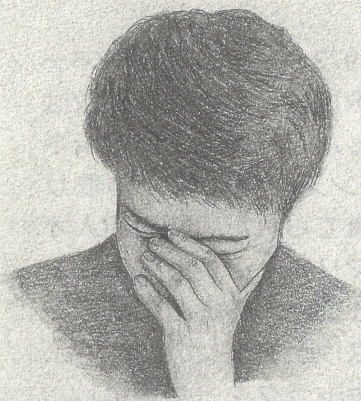
最初の大きな挫折は、25歳の春でした。将来は、寺の跡を継ぐことが運命づけられていましたが、理系の科目が好きでしたので、宗門の大学へは行かず、広島大学理学部物理学科に入学しました。大学3年の秋(昭和40年)に、朝永振一郎博士が素粒子

青春の狭い門

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

物理学の「くりこみ理論」でノーベル物理学賞を受賞されました。それに感激して素粒子物理学を研究する研究者になろうと決心し、大学院に進みました。しかし、この研究が世のた

いではなかったのか」と思いはじめ、挫折感を深くしていききました。人生で初めて出会った「青春の狭い門」でした。この研究も何も手に付かない状態が半年ばかり続きました。その頃は、生きていくことが体が息苦しくなってきました。思えば、「人間なんのために生きているのだろ」という問いの固まり(大疑問)のただ中にいたのです。私の様子を心配した母が、「今、一畑寺で『安居会』という坐禅会をやっているから、ぜひ参加しなさい」というので、



挿絵 平尾恵郷

めになるとは思えないと感ずるようになり、研究すること自体が、息苦しく感じる日々を過ごしていました。悩んだ末に、プラズマ物理学に研究の方向を変えました。

そこへ指導者として来ておられた方が、南禅寺派管長の勝平宗徹老師でした。その方が禅の書物である「碧巖録」の中の「鏡清雨滴聲」(碧巖録第46則)という公案について提唱されていました。この公案の主要箇所は、次のようなものです。「鏡清、僧に問う、門外

是れ什麼(なんの)の聲ぞ、僧云く雨滴聲。清云く、衆生顛倒して己に迷うて物をおう」当時、この鏡清和尚と僧との問答は、何のことだか全く理解できませんでしたが、私は「衆生顛倒して己に迷うて物をおう」(私たちは自分の外部ばかりに目が行き、外のもので自分を満たそうと迷っている)の部分を探り返して、暗誦していると、「私は外部ばかりに目が行き、外のもので自分を満たそうと迷っていたのだな」という自分の状態に気が付きました。

これからは、内部で「自己を究明」していくことが大切だということが分かり始めると、身も心も軽くなりはじめました。このように心が決まってくると、不思議に研究も順調に進み始めました。若き日に大きな夢を持ち、そして挫折を体験したことに感謝せずにはいられません。